



1960~70年代の若者を虜にし、一大センセーションを巻き起こした「アイヴィー・スタイル」。

FASH-
ION

Japan Saved American Style? 日本が救ったアメトラ

アメリカ発のアメリカン・トラッドは、日本独自の視点で解釈され世界に広まっていった。日本のメンズファッションの発展を分析した本を、中野香織が紹介する。

By Kaori Nakano

昨年12月に出版されて以来、尽きぬインスピレーションの源になっている一冊の本があります。“AMETORA: How Japan Saved American Style”（「アメトラ：日本がアメリカンスタイルを救った物語」、著者はデーヴィッド・マークス（W. David Marx）。概要をごく単純化してご紹介しますが、明治時代初期の洋装化の話から始まりますが、おもに第二次世界大戦後から現代までの日本のメンズストリートスタイルの発展をアメリカとの関係のなかにたどるファッション文化史です。

詰襟の制服以外に「着るものがない」状態だった戦後日本の男性を救うべく、石津謙介がヴァンチャケットを創設。アメリカのアイヴィーリーグのスタイルに模範を求め、輸入し、「アイヴィー・スタイル」として日本独自のルールを作り、「メンズクラブ」などの雑誌メディアを通して啓蒙し、普及させる。ところが、日本の大衆にこのスタイルが定着するころには、「本場」のアメリカのカレッジにおいてはすでに誰も着ていない。現代においては、アメリカ

のほうが、日本独自の発展を遂げたアイヴィー・スタイルを新鮮な目で発見しおしている。また、ジーンズも含めアメトラの最上のもの多くは、ユニクロ、MUJI、A Bathing Ape[®]、鎌倉シャツなどの日本のブランドが丁寧にリメイクし、世界を相手に売っている。つまり、アメリカではとうに廃れてしまった「アメリカの伝統的な服」を救い、上質な形で世界に普及させているのは、日本だったのである……。

そんな物語を展開していくダイナミックな話法にも魅了されますが、驚かされるのはむしろ細部です。日本人も知らないような豊富な具体例が、鋭くもエレガントな考察のなかに、ふんだんに紹介されます。雑誌、ミュージシャン、スタイリスト、カリスマのスタイルアイコン、渋谷や原宿の小売店のプロデューサーなどの固有名詞もざくざく出てきて、このあたりのカルチャーに触れて育った人間は興奮続きでしょう。

この斬新でニッチなアイデアを、粘り強いリサーチを続けて形にしてみせたデーヴィッド・マークス氏とは何者なのでしょう？

彼はハーヴァード大学で東洋文化を学び、慶應義塾大学大学院の商学部で修士号を取得、東京で暮らしています。今から7年ほど前、デーヴィッドがまだ慶應義塾の大学院生だったころ、ドイツからの留学生とともに、明治大学の私の授業にゲスト講師として来てくださったことがあります。長身のイケメン二人の登壇に女子学生は騒然としましたが、それ以上に、日本人ですら知らなかった日本のファッション状況を、品格ある日本語で流暢に分析していくその面白さに、学生とともに陶然としたものです。現在はグーグルの社員でもあります。この本を書くために、国会図書館に保存されている『メンズクラブ』『平凡パンチ』『ポパイ』などの雑誌のバックナンバーや絶版本を丹念に調べ、当事者にインタビューし、執筆に2年以上かけています。その結果、横須賀の若者と1980年代ヤンキーの関係をはじめとし、日本のマニアも知らなかった話が多々あぶり出されています。

さまざまな読み方ができる豊饒な本ではありませんが、著者デーヴィッドに、読者にどのような反応を期待するのか、この本がどのような影響を与えると思うか、愚問ですが、あえて聞いてみました。

「アメリカのスタイルがすんなりと日本に入り、受け入れられていったなどということはない、ということを知ってほしい。アメリカのスタイルが日本に受容されるのは簡単なことではなかったし、時間もかかりました。日本人は、アメリカが好きでアメリカの服をまねたわけではなかったのです。日本のブランドを紹介する日本の雑誌から学び、日本人が着こなす服を見て、日本の店から服を買っていました。その結果、生まれたものを僕はアメトラと呼んでいます。日本で流通するアメリカの服ではなく、アメリカの服を日本に適応させた別バージョンなのですから」

とりわけ日本の読者に対しては、次のようなメッセージも。

「日本の文化を押し進めてきたのは、反逆者だったということを理解してほしい。真の革新者は、ルールを守ったり、因習的な智慧に耳を

傾けたりはしなかったのです。石津謙介は小売店と闘い、両腕と闘い、警察と闘って、日本の若者に服を届けました。今日の日本の文化があるのは、彼らのような闘うヒーローがいたからです」。横須賀の「不良」はじめ、因習や権威に背いてきた若者たちのファッションへの貢献についても本書は触れています。

戦後の日本のメンズファッションはアメリカ文化の影響を大きく受けていることはたしかですが、この本が伝えるのは、日本はアメリカの「文化帝国主義」のせいでは「日本らしさ」を失ったりはしなかった、ということ。日本人が輸入し、日本人がルールを作り、日本のメディアが伝え、日本のショップが売り、日本人のスタイルアイコンを通して広まったアイヴィーは、日本の重要な文化として定着し、今では元祖アメリカよりも「日本らしい」スタイルとして世界に発信される。グローバルゼーションとはなにかということを通して考えさせてくれる、ユニークな大作です。



『Ametora: How Japan Saved American Style』

W. David Marx

この一冊で、日本のメンズファッションの発展を知ることができ、これからのファッションを考えるヒントを見つけることができる。



中野香織 エッセイスト/服飾史家/明治大学国際日本学部特任教授。過去2000年のファッション史から最新モードまで、幅広い視野から研究・執筆・レクチャーをおこなっている。4年間にわたる『サライ』連載「紳士のもの選び」をまとめた本が4月中旬、小学館より発売予定。http://www.kaori-nakano.com